

ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと、風

第97号(2014年6月)

風に吹かれて(75)

白井啓治

『五月雨を飛び越して大暑くる』

五月十八日、札幌で曇交じりの雨にふるえて「リラ冷えか」と納得して翌日茨城に帰ってきたら、毎日のように気温が上昇し、月末には三十度をこえる真夏日になってしまった。梅雨を飛び越して真夏が先にやってきては駄目だろうと声にしてみた。それで慌てて季節が順番待ちをしてくれるのかと思いきや、まさかそんな事にはなる筈もない。だが、この夏は冷夏になりそうだと予想が出ている。一体どうなっているのだろうか。

気象の規則性が乱れている所為ではないだろうが、世の中のあるべき姿も乱れに乱れているように思えて仕方がないが、そう思うのは私だけであろうか。

世の中のあるべき姿と言えば、またまた漫画がその本領を發揮してというべきか、大きな問題を提起してくれた。

中沢啓治氏の原爆体験を元にした自伝的マンガ「はだしのゲン」が表現が不適切として学校や公共図書館から締め出そうという事が起った。そして、一時閲覧禁止にもなった。それは解除されたが、いまだに一部の馬鹿な者達が、悪書として子

供達に読ませるのを禁止しようという運動を起しているという。頭の程度の低さ、文化程度の低さに驚くばかりである。

ところが今度は、雁屋哲原作・花咲アキラ作画の「美味しんぼ」が不適切とつるし上げられている。マンガの主人公が福島取材から帰ってきたら、疲れやすくなり、ある日突然鼻血が出た...というものである。これは福島原発事故の風評被害を拡大するもので、生活圏内の放射線レベルでは生態に影響を及ぼす事はなく、その地域は安全である、として大騒ぎをしているのである。

放射線被爆に関しては、被爆した放射線量ではなく、被爆したか被爆しなかったかが問題なのだとする論文が発表されており、世界に認められている事実である。にもかかわらずこのレベルの被爆は安全であるという。

なぜこんな理論が出てくるのかというと、現状における安全証明の方法の一つとしてある、確率法則に基づく推論方法として有意差検定によるものと言える。小生、理系の人ではないので詳しくは説明できないのであるが、要は「確率的に偶然と考えられるか否か」を検定する方法である。有意とは字の如く「意味がある」という意味で、「意味のある差」を検定するのが「有意差検定」で、この検定に有意差無しとされれば、それは単なる

ふるさと風の会会員募集中!!

会報「ふるさと風」も、お陰様で今年9月には創刊100号を迎えます。ふるさと風の会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

偶然の出来事であり、因果関係はないと証明する、あるいは認める、という理論である。どのレベルをもって有意差無しと検定するかは、生命の危機などその重要度によって決まってくるといえる。

ややこしい話であるが、安全への妥協点を探ると考えれば良いだろう。詳しい事は、小生に代わって何方かがバトンタッチして頂けることをねがうものであるが、安全証明というのは確率論に基づいた推論方法である「有意差検定」で決められると言うことも知っておくべきであろう。実は怖い話なのである。

『内憂と外患』(1)

菅原茂美

人は誰にでも『内憂』と『外患』は、付きもの。どんな個人、どんな国家にも、この煩わしい厄病神が付きまとう。かなり羽振りよく見える人も、払いのけられない内心の「憂い」が多少はあり、そして外部からの重苦しい圧力が「患い」として付きまとうているに違いない。

私のように、生まれつきの極楽とんぼでも、「内なる憂い」は多数ある。劣等感・中途半端な性格などで、いつも自己嫌悪。岩手の貧乏な田舎育ちで口下手。関東へ来て回転の良い人の早口で、ぼんぼん飛び出す標準語には、ついていけなかった。何の因果か女房は東京生まれの、かなり裕福な育ち。私は最初、標準語がしゃべれず、人前では口ごもりがち。社会一般からも岩手の山猿が：と言われているようで明朗闊達には振る舞えなかった。しかし口先上手で、一見利発そうな連中にも、人生トータルで、最後は負けないぞ！と、隠忍自重を続けてきたつもりである。

私にとって何事も「中途半端」は、長年の悩みの種。これだけ熱心に何かに夢中になっているのに、仕上げを見ればみんな中途半端。プロ級というにはほど遠い。例えば我が人生の、かなり重要な位置を占める「趣味」についても、ある線までは行くが、それから先に進めない。私は下手の横好きで、かなり多趣味である。

7歳から始めた将棋、17歳からの囲碁、37歳からのガーデニングと日曜大工。72歳からこの「風」の会に加入し、物書きの恥かき。そして遅まきながら77歳からの家庭菜園。いずれもかなり夢中になったが、これといって、一流と言えるも

のではない。即ちプロ級ではない。

その他、麻雀・野球・ゴルフ・バレーボール・ボーリングなど、ずいぶん情熱を注いだが、いずれも剋目に価するものはなかった。

将棋は高卒の頃、有段者になり、小さな大会などでは、よく優勝などしていた。しかしその後の人生で、身の周りに強い将棋指しがあまりおらず、本を買ってずいぶん勉強もしたが、それっきり。離れて暮らす実弟は棋院の2段だが、たまに対戦すると、まあまあ。要するに私も弟も中途半端。

囲碁は、やはり高卒の時点で有段者となり、大学では多くの対戦相手に恵まれ、実に楽しい学生生活であった。そのころの仲間二人と今でも対戦を続けている。今3人ともある大会に所属し、そこでの段位は3人とも5段で、よきライバル同士である。しかし、去年出たパソコン囲碁ソフトでは、最高位の4段と私は今、無我夢中で対戦中。まあまあ成績。近く5段のソフトが出ると聞いているが、挑戦してみたい。

囲碁は私の人生に、大きな喜びをもたらしてくれた。64歳の時、前立腺癌で、筑波大病院に90日間入院。5年後の生存率55%と宣告され、落ち込んでいた。手術に放射線。大腸粘膜は酷い被曝ケロイド。だが病院の待合室に碁盤があったので、一人棋譜を並べていたら、いつともなく、同好の人々が集まり、ほとんど毎日碁に明け暮れた。がんなどすつかり忘れ実に楽しい毎日であった。囲碁将棋は集中力養成に最適。受験生は塾通いなどするなら、碁でも打っていた方が効果的。面

さて、「中途半端」と言わせない基準とは？それはプロの領域の人。それでメシが食える人。そこまですとはいわなくとも、囲碁なら、県代表く

らい(6段)の実力ならば、ご立派と言いたい。私の現状は県代表には、ほど遠い。

次はガーデニング。花や樹木で、環境を整え、人生に潤いを持たせたい。まず旱月盆栽は40年以上もやっているが、40年はまだ経験不足。ある時期には200鉢もあったが今は7鉢に厳選。いずれも根回りは、ビール瓶近くの太さにはなった。しかし、これも大きな競技会などでは、とても入選などできない、独りよがりの自己満足のみ。割り箸のような細い苗から育てたので、他人の評価はいざ知らず。愛着はこの上ない。その他、諸々の花や樹木を育てた。蛍ヒバ、山法師、ボタン、獅子柚子、木瓜(ほけ)の東洋錦と銀獅子、椿の月の輪、金伽羅(きんがら)は私の自慢。しかし、見る人が見れば、ガラクタの寄せ集め!?

私は定年退職後、公民館活動で庭木同好会に加入し、プロの庭師について毎月1回5年間計60回剪定や植え替え、病虫害防除などの技術を学んだが、所詮アマの領域を出ていない。

そして日曜大工。電動工具は7種類を駆使して、この40年間、物を作りまくった。例えば冷蔵庫と壁との間のわずか15cmでも、4段ぐらいの棚を作れば何かと便利。部屋の隅の、デッドスペースも3角の飾り棚を作り、哲学者のような顔をしたフクロウが鎮座。ガーデンテーブルに椅子。本棚・物置。犬や猫の小屋。親の介護のため玄関にスロップ&手すり。檜の丸太で氏神様の鳥居も作った。しかしテーブルなど作る時、4角を45度の板で縁取りすると、どこかに隙間。そこが素人だ。

そして、物書き。この「風」の会報に、これまで77か月、毎月書きまくったが、独善と偏見が充満。起承転結も整わない。長い役人生活で、上下

左右から無数の圧力。言いたい事もままならず、それが定年退職で青天の霹靂。積年の鬱憤を一気に爆発。白井先生の『菌に衣着せた物言いなら書くな！』『自己責任で奔放に！』その言葉に励まされ、勝手気ままに書きまくったが、プロの目から見たら、なんじゃこれは……かな？

自慢話めくが現役時代、研究論文は随分書いた。日本初、豚の「オーエスキー病」の創意的な清浄化対策を体験発表（昭和59）したら、注目を浴び、全国²²の都道府県から⁴³回も講演依頼。更に全国の研究発表会で最優秀賞を頂いた事もあった。それを根拠に農水省推薦で、外務省の囑託として中米での国際協力事業にも参加。与えられた外交官・パスポートは実に有力であった。

世の中は、先進国の表面だけを見てきて、それを真似ようとする傾向があるが、世界には発展途上国の存在もすっかり認識必要。先進国の独善で産業発展↓環境汚染。こんな罪悪を許してはいけない。常に地球俯瞰で物を考え、現在の地球は、「未来の子孫からの預かりもの」という概念をしつかり心に留めて置く必要がある。

研究論文を書きなれた手で、コラム・エッセイなどに手を出し、ぎこちなく、読みづらいかもしれないが、発展途上の作文と、ご容赦願いたい。そして最後は、現在夢中の家庭菜園。こんな面白いものは他にない……と思うほどに嵌っている。自分の食べ物自分で作れ！少々無理かも知れないが、これが理想。

店に一回出回っている野菜は、最短でも収穫から丸1日は経過している。しかし、自分で作れば、収穫即丸かじりなど可能だ。条件が許せば、この道を極め、自給率を高めたい。隣家地主様のご厚意

により借地ができ、夢が実現。現在51歳の畝が¹³本。これまで¹⁵種類ほどの野菜栽培を経験した。体力にも限界があるので、¹⁵本ぐらいまで畝を増やし、それから後は精度を高めてゆきたい。隣近所にお裾分けで喜んで頂くのも嬉しい限り。プロではないが、自分で物を作る喜びは、何にも代えがたい。素人で良い。人生の終末期に、新たな喜びの種を見つけたのは、真に幸いであった。

【「壮にして学べば老いて衰えず」という言葉がある。学びの扉を叩くのに年齢は関係ないと思う。長年の劣等感も、下手の横好きでもいいから、こつこつ努力を重ねれば「歳月の魔法」で、いつかは光明も点（き）してこよう。趣味ではかなり中途半端であったが、私の生涯をかけた本職では、それほどいい加減ではなかったつもり。獣医学の専門分野では、日本初の「ブタ・パルボウイルス」の発見（昭和⁴⁴年、石岡市三村）と、その対策開発に繋がる業績を残した自負もある。】

*

さて、中途半端ながらも、趣味は我が人生に豊かさを増したと言えるが、「内憂の種」は他にも多数ある。それはわが身に巣くう「病」の種。老化と共に発生した「がん」である。主治医のお陰で、うまく付き合い、今でも働いているが、がんのしつこさには、恐れ入った。しかし先に連載した「進化の代償」として人類は、がんを背負い込んだ経緯を考えれば、そんなに苦痛ではない。¹⁷歳で肺結核。抗生物質のない時代を生き抜いたのだから、かなりの抵抗力は獲得したものと信じている。

その他、儂くも敗れ去った初恋。募る未練に涙した日々。そして心機一転、科学者になりたかった夢も霧散。今は歳なりに腰痛やら五官の劣化、

体力・気力の低下など、きりが無い。

そして卑近な例だが年金は下げられ、物価は上昇。それでもこの田舎でつましく暮らせば、何とかはなるが、ちよつと羽目をはずして海外旅行など続ければその出費はただ事ではない。余生はあと何年あるか知らないが、芝居見物や、アントラーズの応援ぐらいは続けたいもの。女々しいボヤキが多くなつた。国や自治体のベラボウな借金を思えば、介護など、あまりお世話にならずに、すんなりとこの世に「おさらば」したいもの。

*

さて次は「外患」である。外部からわが身に攻めてくるもの。個人としては、その第一は感染症の病原体であろう。人類は長い年月をかけ、病原体などには、免疫で身を護る機能を獲得したが、それを超える強烈な相手には手を焼く。環境清浄化の為、常在菌までも殺す過剰消毒で清潔度を保持するのは正に愚行。それにより人類は、免疫力を低下し抵抗力の低い脆弱な人口が増加。種としての生命力の低下を招いている。身の回り全てが、抗菌加工剤で囲まれ「キレイ」づくし。こんなのは商業主義が撒いた「毒」である。赤ちゃんは何でも舐めて、自ら免疫力を育てている。

地球温暖化が進めば、熱帯の多くの感染症、特に、いまだにワクチンのない「マラリア」などに、この温帯地方でも蔓延する可能性は、非常に大。私はマラリア蔓延地帯で仕事をしていたが、マラリアの悲劇は、筆舌に尽くしがたい恐怖である。そして私自身アムエバ赤痢に感染し、3日で7kgも痩せ、死線をさまよつた経験もある。

近年国際貿易が活発になると、コンテナの隅などに他国の病原体や寄生虫卵、そして植物の種等

が付いてきて、処女地の聖域を荒らす。最近明確になったことだが、オーストラリアのユーカリを枯らす真菌(カビ)が、カナダ北部の米マツを枯らし、更に植物から動物へと感染対象を変換し、犬猫に、更に、人間にも感染し、肺炎・脳炎で、死亡率30%の脅威……と報道された。貿易の自由化には、落とし穴があることを忘れてはいけない。そして経済界は、グローバル化云々などとほざいているが、私に言わせれば、それは「猿智慧」。こんな恐ろしい自然界の脅威を知る由もなかった……は済まされない。国の役所に「検疫所」がある。法に従い輸入される動植物は、この門をくぐらなければ、国内に入れない。しかし、現段階の技術で検出できない病原体があったり、検疫と関係なく台風や黄砂、渡り鳥や旅行者の靴や衣服など、手に負えない侵入経路もある。国境線など、紙に書いただけの「線」で、島国といえども、いつ、どこから何が入ってくるかわからない。

この4月、熊本県でのトリインフルエンザは、渡り鳥が運んだみたいと言われているが、4月、渡り鳥は南から北へ帰る季節。韓国で現在流行中と同型の病原体がどうして南から北へ帰る渡り鳥が持ち込めるか。去年の秋に北から南に渡る途中で、九州に置き土産。それが何らかの方法で病原体が死なずに残っていて今、発症した可能性は否定できないが、その確率はかなり低い。私見であるが恐らく最近、日本から韓国への旅行者が持ち帰った可能性が高いと私は見る。いくら仲が悪くとも、韓国人が今、悪意を持って日本に病原体を持ち込んだとは考えたくない。このように盛況な国際交流は、多くのプラスもあるが、隠れたリスクも確かにある事を忘れてはいけない。

さて、これまでに商業主義に毒された科学は、たとえば、抗生物質を産生する新種のカビなどを探して熱帯の奥地をひっかきまわし、放つとけばおとなしくしていたエボラ出血熱・ラッサ熱などを、文明社会に持ち出し、人間に感染し、強烈な死亡率で世界を震え上がらせた。エイズも同じこと。私は人類が滅亡する事があるとすれば、これらの新興又は再興感染症に人智が抗しきれなくなった時と考えている。表向きは人を救うため。内実は金もうけのための科学の進歩は、もうごめん。人類は自然界のほんの一部に過ぎない。万物の霊長とか、奢りを捨て、もつと素直に、つつましく生きていくべきである。

*

外患として最も醜いものは、「人の足を引つ張る」現象。誰かが出世したり、名をあげると、必ず「粗拾い(あらひろい)」するヤツが現れる。ご存じスタップ細胞問題で、理研の調査委員長は、それ捏造だ！改竄だ！と大声で若手研究者を罵っていた。ところが、舌の根も乾かぬうちに、自分自身もかつて切り貼り映像の論文を発表した事が表面化し、委員長の職を辞任。醜聞極まりない。更にノーベル賞のiPS細胞・山中教授にまで、クリームをつけた奴がいる。世もお終い。粗拾いは、米屋の番頭に任せておけばよい。

その他与野党の醜い粗探し。弱小政党の乱立はうんざり。少数の意見も、貴重なものは与党も吸収する度量が欲しいが、少数党は、「多数の暴力で〇〇を可決した」……と与党を罵る態度は不条理。議会民主主義は多数決より他に採決の方法はなからうに。負けて悔しければ多くの国民に支持される政党に発展すべきだ。そして、外患として最も

気をつけなければならぬのが、「詐欺師」。我々凡人には気がつかないような詭弁を弄して人を欺く。振り込め詐欺とやら、最近ネット販売詐欺も隆盛。巧妙な手段で老人のなけなしの虎の子を奪い盗る。あるいは、まがいものを買わせる。金だけ送らせて、品物は届かない。問い合わせはメールアドレスのみで、住所・電話番号など全く聞気が付いて警察に訴えた時には、既にドロン。近年そういう悪党が多すぎる。あれだけの悪智慧が働くのなら、その知能を社会に役立つ面に注げば、人から尊敬されるのに。

*

さて、長々とこの世の不都合を書き続けた。なぜこんなにも人の世は、争いが絶えないのか？ 私の長年の人生経験から導き出された結論は、所詮、生物とは、40億年前この星の浅い海の底に誕生した「利己的な遺伝子」に支配される、ただ一個の「原始細胞」の子孫だからである。全ての生き物の出発点はそこにある。自分の子孫を残す為に、栄養と繁殖相手の争奪戦に終始。そして、細胞分裂した仲間さえ、即ち共食いさえ拒まない。これが生き物の本性である。それが進化した霊長類即ち人類もその例外ではない。渡る世間は鬼ばかり。それがこの世の真相なのであろう。

しかし人類は、折角大脳を膨らましたのだから、もう少し生存の原理を超越した高次元の安寧の世界を夢見てもいいのではないか。博愛に満ちた、「聖なる世界」などと、きれいな言われない。ただ他人に迷惑をかけない、貧しくとも、平凡で安全な世の中を、皆で創建していきたいものだ。

前回まで高浜ルートと関宿でから江戸川に入ったことや途中のショウトパス陸路と運河・水門など、また那珂湊ルートや行徳船などについて書いてきた。今回は霞ヶ浦先端の水門について述べたいと思う。

七、霞ヶ浦の水門

霞ヶ浦が海に注いでいる出入り口を見たいと地図を広げると、利根川に架かる橋は、大きなものは銚子側から「銚子大橋」「利根かもめ大橋（有料）」「利根川大橋・常陸川大橋」「小見川大橋・息栖大橋」「北利根橋・水郷大橋（国道51号線）」となっている。

霞ヶ浦からの流れを制御する水門があるのは利根川と常陸川が合流する手前の「利根川大橋・常陸川大橋」のところだ。銚子の利根川河口からは18.5km上流にある。

さて、現在の霞ヶ浦の先端は潮来・佐原水郷の入口部分に当り潮来市牛堀地区の国道51号線（北利根橋）から常陸川が始まる。北浦は更に先にあるが、明治期の水運はこの牛堀から横利根川に入り横利根閘門を通じて利根川に入っていた。

この常陸利根川と利根川で挟まれた地区がいわゆる潮来の水郷といわれる地帯となっており、2つの川に挟まれた中洲地帯に与田浦という水辺が広がり、十二橋などの観光地があり、潮来の町とはまた違った船旅などができます。

前から何度も銚子に出かけており、この中洲の利根川沿いの土手に沿った道を先端まで走っていません。

国道51号線で佐原（香取）の町に入る手前（横利根閘門のところ）でこの利根川の土手沿いを走ります。右手が利根川の堤防で、左手には広大な水田が広がります。土手の道は遊歩道がついていますが、そのすぐ下を走ります。この道は車両の横幅を制限しており、大型のトラックがはいれないようになっていています。

そしてこの中洲をしばらく走り、常陸利根川は霞ヶ浦北浦からの流れと合流したところに息栖（息栖神社近く）大橋（この道の利根川に架かる橋は小見川大橋です）が架かっており、この中洲の道を更に下流にしばらく走っていくと左手から常陸利根川が迫ってきます。この利根川側は高い堤防で保護されていますが、常陸利根川の方には堤防はありません。すぐ目の前に水面が広がっています。

土浦の桜川も、石岡の恋瀬川も、また北浦に注ぐ川の水も霞ヶ浦に注ぐすべての川の水はここに集まって流れています。常陸利根川の向こう岸は神栖市で、鹿島臨海工業地帯の工場煙突が何本も見えます。そのまま進むと中洲は終点でここに利根川側と常陸利根川側にそれぞれ自動制御できる水門が設置されています。この水門脇を通る道路があり、この水門堤防の上から両側を眺めることが出来ます。水門の東側（海側）は外洋からの波が押し寄せても水門の上流側には水流の逆流がありません。左右でその違いがすぐにわかるほどです。

八、利根川河口堰と常陸利根川水門

霞ヶ浦は昔は海だった。それもそれ程昔ではない。香取の海、流れ海などと呼ばれていた頃はとつもなく広い内海だった。

江戸時代になり、江戸の街を水害から守るため、

暴れ川であった利根川を江戸湾から銚子の方に流れを変えたる大事業が行われた。

しかしその後も霞ヶ浦には海水が入りする汽水湖となり、魚も海・川・湖などのすべての魚が豊富で、江戸の台所にも欠かせない魚の宝庫だった。しかし、米作りがどうしても日本の食糧生産に欠かせないと、米栽培が優遇されると共に、霞ヶ浦沿岸ではそれまで何度も水害に苦しんでいた人びとの願いから2つの水門が作られた。これが先に述べた中洲の先端に設けられた2つの水門だ。霞ヶ浦から海に流れる川が常陸利根川だ。

ギター文化館

2014 CONCERT SERIES

- | | | | |
|-----|-----|----------------------|----------------|
| 7月 | 6日 | 莊村清志 | ギターリサイタル |
| 9月 | 7日 | 福田進一 | ギターリサイタル |
| 10月 | 5日 | 村治奏一 | ギターリサイタル |
| 10月 | 18日 | 長谷川きよし | コンサート |
| 11月 | 2日 | 樋浦靖晃 (G) & 芝草幹夫 (FL) | コンサート |
| 11月 | 9日 | 里山と風の声 | コンサート 亀岡三典 (G) |

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

水門は利根川の入口と常陸利根川の入口にそれぞれ設けられ、同じように動いているように見えるがまったく動きは別々である。それぞれにこの水門の歴史を調べてみた。

「利根川河口堰」

昭和46年に総工費125億円をかけ完成。

こちらの利根川の水門は完全に利根川沿岸の水田などの塩害を防止するのが目的だが、これに大東京の水源確保という目的が付加された。

この水門は昭和40年(1965年)12月に着工し、昭和46年(1971年)1月に完成している。最大の目的は塩分濃度の調節(水田の塩害防止)にあるが、東京の飲料水の確保(江戸川に送水)も加えられている。しかし実際にはこの飲料水の確保には別な方式が取られ、この水門の役目は多くはない。

それまでは利根川の香取付近や霞ヶ浦の北浦などで塩害の被害が度々あったが、水門の制御で被害は減った。この水門は自動制御され、自家発電施設も備えており、停電時も確実に制御されている。今まで地震でも問題になつたことはないという。川の水量が多く洪水の心配があるときは全ての水門が全開となるが、利根川流域全体で見ると洪水防止は堤防の整備もさることながら昭和3年に完成した利根川上流の権現堂川を仕切つて廃川として調整池の役割を持たせたことが大きいとも言われている。

「常陸川水門」

利根川にかかる水門の橋は「利根川大橋」という。また、隣の霞ヶ浦と繋がる常陸利根川に架か

る橋は「常陸川大橋」という。こちらの常陸川水門は利根川に設けられた水門より少し短いが、この目的は霞ヶ浦の治水(利根川の水位が高くて霞ヶ浦に水が逆流するのを防ぐ)が最大の目的で昭和38年(1963年)5月に18億円を完成した。確かにそれまで霞ヶ浦沿岸では多くの水害が発生しており、水門設置と護岸の整備で水害は大幅に減つたので、その効果があつたということになる。しかし、この水門が完成してから10年間は水害の恐れがある時のみ閉じて通常は水門を開けていたのであるが、1974年に霞ヶ浦側の水位が高い時のみ開けるという方式に変わった。

これにより海水や利根川からの水が常陸川に入ることがなくなり、完全閉鎖と同じ状態になつた。このため、霞ヶ浦は徐々に首根つこを押さえられて死の湖に変わつて行つたのである。

塩害が問題だと水門を閉じ、また、鹿島臨海工業地帯の水源確保などの名目も後から加えられたが、工業地帯の水にはほとんど使われていない。塩害の影響がどの程度及ぶかの検証は不十分で、何時までもこのままでは生態系は完全に破壊されてしまうであろう。

現在国会でもこれを一昔前の方式(洪水の心配のあるときのみ水門を開閉する)に戻す見直しの動きがあると聞いている。私は、是非早急に水門の開放をしていただきたいと思つている。現在、この常陸川の水門の開放時間は年間で500〜800時間(年間の1割にも満たない)ぐらいだ。今は霞ヶ浦の水位が高い時だけ開放するため、海からの水は入って行かないのである。霞ヶ浦は息を吐き続けるのみで吸えないから呼吸

は苦しくなるばかりである。鰻も昔はたくさん採れたが、今では数得るほどしか取れない。

早急に考え直す時期に来ている。

夏のアオコの大量発生による悪臭は、自分で見て匂いをかいだ人にしかわからない。

私も今回調べて初めてこの方式の違いがわかつたのである。

でも、この水門が出来てから霞ヶ浦の自然環境は大きく変わってしまった。

ウナギなどの海からの遡上が仕切られてしまったことや、霞ヶ浦の漁や湖岸に生える植物等も大きな変化があつたという。

少しずつでも理解してどうするのが私たちにとつて良いのかも考えてみたい。

それにしてもこの利根川下流地帯は水田が一面に広がつていて、今では大きなコメの産地になつている。

さて、この水門の開放が国会でも議論され始めていた時に3・11東日本大震災が起つた。

水門施設への影響は無かつたのだが、問題は福島原発事故による放射能が降り注いだ。

霞ヶ浦の水質もしばらく問題となつたが、今では規制は解除され問題は無いとされている。しかし、

湖底にいくほどその放射能の濃度が上がり、水門を開放して利根川から銚子を経て外洋に流れて行つた時に問題を起すのではないかと危惧されている。

風評被害もあるので、調査をしっかりとつて結論を出してほしいと願つている。東京に住んで

いる人々はこの海に流れ出ても銚子から海流は外洋に流れるので東京以西の日本近海には影響がないと考

えているように思う。

これは福島島の汚染水漏れでも同じことが言え、ど

うも真剣味が足りないと思えてならない。やはり国会は福島あたりで行った方がよいと考えてしまう。この水門の開放が遅れているのにもこの事故が関係していそうなのがやはり気になる。

数千年、数万年前からこの霞ヶ浦（流れ海）周辺に人々が住み着き、豊かな資源を仲良く採って暮らしていた。稲敷市浮島の広畑貝塚などでは今から3〜4000年前には土器を使つて藻塩から製塩を行っていた証拠もあるのである。昔の海水浴の出来る霞ヶ浦が復活できる日を願っている。

十六日川から川守宅へ

伊東弓子

今回は問い合わせが多く、その度に勇気が沸いてくるのを感じた。参加者は他町村からの人と地元の新しい顔ぶれが増えたのも嬉しい限りだった。新聞を見て来たというのには驚いた。報道機関に依頼した覚えはないし、本当かどうか捜したが見当たらなかった。不思議だった。何事催しは天気が気になったが当日は正解、晴れだった。

玉里御留川を歩く会四回めは、三月二十五日（火）に行われた。今回歩く所は玉里御留川の中心地だ。敵しい御留川の制度の中で携わった人達の苦勞、自然との戦い、泥々した人間同士の姿などであったか…と考えるではない。と同時に現在生きている私達だって何ら変わりないと確り感じていきたいと思う。

ここ、農民会館のある所は玉里小学校のあった場所だ。坂を下りた左側には玉里東小学校がある。以前は玉川中学校だった所だ。右に医師小幡弦嘉

宅がある。富有柿の生産にも力を入れたご主人も規模を小さくされたようだ。その台続き突端に、要害館（龍害館）（玉里八館の一つ）があった。頭上に聳える森の下を大井戸地区へ入る。右奥に川守宅を見、梶無川の流れをコンクリート歩道の下に聞きながら、大井戸三叉路を右に行く。工用車の車が行き来している所を避けて農道を行く。蓮、胡瓜を育てているビニールハウスが続いている。

十六日川、玉里御留川の一つ（絵図で十三番）は、大きく変わった。江戸時代は数ある御留川の中心の場所だった。網引場は勿論、藻場、納屋場、舟入場、そして四ヶ所も河岸があった。戦後は堤防を造り水田となった。その後埋立て養豚場が出来た。多くの豚を飼育したが同時に排泄物の問題が起き、繁栄の勢いは何処へやら凡て雑草の中に消え、汚物も湖水に交じってしまった。今市民の憩いの場、地域の活性化の為にと広場に生まれ変わるうとしている。ここで十六艘の舟に一杯鯉が取れた等誰も想像できないだろう。朝飯を食べる引子達の喜びの声をあげていた場所だったろうに、当時の喜びも苦しみもみな土の中に押し込められた。新しく出来る広場にも又楽しさや悲しさが産まれてくることだろう。

堤防を行くと、立看板には玉里御留川の図（水戸藩、玉里御留川の挿絵図の四枚めのもの）がある。先生はこの絵図が出てきた時、喜びのあまり涙が出たと聞いたことがある。一面に高浜入江、村名、地名が書かれ村々には山々が並び、川には舟がいく。特に夷の宮は大きく引子達の小さな姿にも確りした動きを感じる十月網おろしの神事の様子である。

ここから対岸の小津の柵塚が見える。左端のビニールハウスの右側に小高い森、それが柵塚で、こ

この稲荷の森と結ぶ線が御留川の要所の一つ。この線の右側が玉里御留川（内川）で、左側が御留筋（外川）と分けられる。写真や話しには松の木に囲まれている森だったが、今は杉の森に変わった。森としては木の数がもつと欲しい感じがする。柵塚の方からは稲荷の森ははつきり見えるだろうか。周囲は蓮田ばかりだ。この辺りにも人家はあったが毎年水が溢れ、農民が難渋している様子に水戸様大変憂いて、御立山を開いて分け与えてくださったという。昔住んでいた人達の氏神さまか、どうか、あちこちに石があるのだそうだ。子供達が遊びに行くと必ず手を合わせている。感心なことだと子供達を褒めている人がいたことを思い出しながら、一の川、玉里御留川の一つ（絵図で十一番）を見当つけてみた。

続いて、岩添川（やぶぐい川）玉里御留川の一つ（絵図で十二番）両方とも稲荷の森の南側ということだけでははつきりしないが、先生が指導していた土浦の機織の生徒さん達が綿を育てていた畑の近くを想像してみた。真つ直ぐ行くと神社の鳥居の前に着いた。少し離れぎみだ人達が急な石段を登る頃になつて纏まり出した。登りきると大分高い、遥かに御川筋の奥迄も見える程だ。台地には長い歴史を物語るものや話しがある。

愛宕古墳。風雪に耐えた十数本の大木。南北朝時代の刺激を忍ぶ愛宕館。川守も祈った愛宕神社は地域の祭りの舞台でもあった。滝平二郎氏の作品にも描かれている。火の神の神事は今も続けられている。

すぐ眼下にある川（漁場）は以前は愛宕下御留川と呼んでいた頃、直網時代の川守は豊漁を祈願して一日二度のお参りを十七日間続けた。十二月二

十六日の夜、月明りに鯉が四、五匹飛び上がるのを見、大漁の兆しありと報告し船に乗って待ち構えた。二十七日の夕方大鯉がとれたわ、とれたわ十六艘の舟に一杯だった。そこからこの川を十六艘川と名付けられ、九十五年の文献には十六日川とするされ、現在土地の人は十六日と呼んでいるそうだ。地名にはその歴史があり、生活してきた人々の表情があるのだから大切にしたい。

新しい墓地の傍を通って無尻久保（玉里六畑の一つ）が右斜下に見えた。乳牛を飼育していた人もやめた様子だ。

小さな古墳の畑道から、山田峰古墳（玉里八艘の一つ）に抜けた。四十年前に一族の墓が古墳の中腹にあったが、数年前に古墳下に移された。いよいよ川守宅が近い。道が二つに分かれる所でみんなに声をかけた。

「川守吉之丞が日に二度愛宕神社へまいった道はどっちでしょうね」
「こつちだよ。こつちが近いよ」
と地元の参加者が言ってくれた方を選んで、さく道を歩いて五十メートル、川守宅の前で全員揃うのを待っていた。そこへ学芸員がタイミングよく来てくれた。安心した思いだった。前後、中間のグループに調整しながら走り回った気疲れがあったから。

川守宅の長屋門を潜った瞬間、頭を掠めることや胸に熱い思いが込み上げてきた。寛永二年（1625）から明治三年（1870）の間、十代にわたり長い年月と御留川、四十八津の広範囲の係り、直網から運上制へ制度の変った中で、藩と下請けの間でどれ程苦勞があった事だろう等一人思った。御留川が廃止になった後、記録を整理された当

時の方々の努力も今日、日の目をみることにになったのだと改めて感じた。

源太左衛門の名は先々代で終りになった。農業をし続けてきた奥さんは姑さんからよく話を聞いていた事が今回知っている限りお話しが出来たと喜んでた。先祖のしてきた事が世に出た事でお役にたてば苦勞も報われる事でしょう。いつも低姿勢の方で、茶を振る舞ってくださった。ご馳走になって川守宅を後にした。貯水池から水田にそして今は蓮田に変わった。

女池はきれいな水を十六日川の活漕まで送っていた。きれいで豊かな池は女池に棲んでいた雌竜の話も産み出したのだろうが、今はきれいな水に変わって泥の中から美しい花を咲かせて玉川地区の産地として蓮づくりの池になっている。池の西側に芦久保（後久保）（玉里六畑の一つ）が見える。作物が作られなくなって久しい。あつという間に竹林になってしまった。

市街道が女池の傍を通って府中へと続く。その道沿いにアイヌ親子の墓があり、地元の人々の優しい心がそこに向けられている。

要害館の削られている姿も残念だが、大井戸、次回のコースになる川中子は水の苦勞の絶えない中で古墳の土や山、崖の土が大分使われたようだ。学芸員が間に合って何より力強かった。最後の締めをしていただき本当によかった。後で分かったことだったが移動になったという事で、驚いた。前にも二回今回のような理不尽なことがあった。専門の資格はあまり重視しないのか、一般人はどうとらえたらいいのだろうか。

今回は年配の女の人からの問い合わせが多かった。この地に住んでいてもこの事、何も知らな

い、散らしを貰って初めて知った。こんな所があるのか、こんなことがあったのかと知るともっと知りたい、教えて貰いたいと楽しくなるといふ。まさにこれだ。歩いて話していくのは時間がかかるから略しがちだけれど丁寧にやっという。

車一部利用の話もあったが、やはり歩くことを重視していくことにした。
受付の段取りが悪く手ちがいが見られた。統一してやっという。

会が一步飛躍する為、対外的にも形整える意味でも会員を募って総会を行った。新たな出発の日で開散した。

仲之内町の大獅子

兼平智恵子

恒例の石岡のおまつり（毎年敬老の日が加わった三百間）は一年交代による年番町を中心に行われています。年番町はおまつり終了時から次の年番町に引き継ぐまでの一年間、神社への奉仕に務め、祭礼時には「御仮殿」を造営し御祭神をお迎えする大役を担っています。

明治三五年八月に十六町内による新しい年番制度が生まれ、当会報にて各町内自慢の出し物と共に、すでに十四町内をご紹介してきました。今回は仲之内町の大獅子です。

仲之内町は現在府中一丁目となっています。石岡駅より八間道路（御幸通り）を前進し、水戸信用金庫石岡中央支店の交差点を右折、（右側の角はたばこの宮川商店様）一方通行になっている道路を入り間も

なくして、十字路交差点を越え、右側に隅之宮福徳稲荷神社が鎮座しています。この一方通行の道路と稲荷神社を中心として広がる現在は二十五世帯余りの町内となっています。

石岡市教育委員会発行「石岡の地名」によりますと地名の由来は不詳。戦国期は府中城の一郭、慶長年間（一五九六～一六一五）の府中町成立後町立て形式、近世中期以降、府中十三町のひとつ、香丸組に属すとあります。また町内十字路交差点の近くに旧町名が刻かれてある石碑には、町名の由来は奈良時代の常陸国條坊制ゆかりの地名ではないかと言われているが定かでない。とあります。

仲之内町の獅子頭は紀年銘から現在確認できる最古の獅子頭で明治二十九年十一月の仲之内町福徳稲荷神社祭礼の際に製作奉納されたものであるとともに「富田のささら」「土橋町の大獅子」について神幸行列の露払いを務めています。

仲之内町の獅子頭は正面六八センチ（耳まで二三センチ）、顎幅六二センチ、最大高五五センチ、側面幅六五センチ、重さ約二四キロと三十余りの町内の獅子では一番大きい獅子頭を誇っています。全面朱色、眉が非常に太く目、鼻が比較的小さい。鼻先は黒く塗られ、頭上には高さ二十センチ、直径一八センチもある、金色の宝珠型の珠を着けています。この宝珠は仏教を、角は道教を示すと言われていますが普通これを雌、雄と呼んでいるところが多いということです。神輿の露払いを務めている土橋町とは相町になっており、宝珠を着けている仲之内町の獅子は雄、土橋町の獅子が雌といわれているそうです。両町の獅子頭は歴史が古く大切に保存され今年も揃って大切な役目を果たされることでしょう。

相町とは年番の際お互いに協力しあい、また平年でも祭礼中日以外にも、それぞれの町内へ、獅子、山車が訪問しあつて御馳走を受けるなど、いわば親戚付き合ひをする町内であるとの事。

相町の組み合わせは次のようになっています。守木町―香丸町、大小路町―守横町、金丸町―青木町、富田町―國分町、幸町―泉町、中町―若松町。

仲之内町には獅子頭が二台あり、歴史のある、大獅子（市指定有形民俗文化財）は露払いの役目を担い、のちには町内の会所に鎮座し、小獅子が町内の巡行を果たされいるそうです。

参考資料 常府石岡の歴史・いしおか昭和の肖像

・新緑も出過ぎは摘み取られ 智恵子

札幌公演

小林幸枝

五月十五日（十九日）、北海道札幌へ出かけ、初めて白井先生以外の方の朗読で手話舞を舞ってみました。

宮城県気仙沼市で東日本大震災の大津波にあつた方の実体験をもとに、昨年十一月の東京公演の時に衣装を担当して下さった熊谷敬子さんが書き下ろした朗読劇「かがり舟」に、私の手話舞を加えた舞台でした。

熊谷さん達は、東日本大震災の事を大切な教訓として、何時までも忘れないよう語りつないでいこうと「つむぎびと」という表現グループを立ち上げ各所で公演しています。そこに私が東京公演

のご縁で、是非一緒に舞台に立ちたいと実現したのです。

公演が行われた札幌の「かでの2.ホール」のあるビルに、北海道ろうあ連盟が入っていて、ちょうど総会が開かれており、そこで万葉集の手話舞をデモンストレーションさせてもらいました。舞台本番には、ろうあ者の人達が招待されて大勢観劇して頂きました。

札幌公演では、東京公演と同じようにピアノ、フルート、ギター、パーカッションによるバック演奏がつき、熊谷さんの朗読で手話舞をすることが出来ました。作曲とピアノ演奏をしていただきました木村雅信先生からも大変綺麗な舞いでしたと嬉しい言葉を戴きました。

6月14、15日のギター文化館での定期公演でも、熊谷さんと一緒に「かがり舟」をギターの亀岡さんの演奏で演じます。

このような楽しいコラボレーションを毎回つくっていかたいなと思っています。ギター文化館での6月公演宜しく応援ください。万葉集・古今集の舞の衣装も熊谷さん作です。

《ふうの》

アレンジ・蕎麦・蕎麦を席料理のお店です。

（ギター文化館通り）

看板娘（大）「うらら」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

011-836-4000

【風の談話室】

今月号からこのふるさと風の会も9年目に入る。おめでたい九重の年に入るわけである。この九重の祝いの年に当会報も100号を迎える事になる。ふるさと風の会としては、最も大きな節目としてのイベントを計画・進行中である。100号記念として別冊ふるさと風の刊行を企画し、会員各人が原稿の依頼をしていたのであるが、先日早々に「投稿を頂いた。実に幸先の良いスタートと関係者大喜びした。」

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

八十路の曲がり角

田島早苗

歳の初めの風邪が意外に長引き、気が付けば春の足音が聞える季節になっていた。

そろそろ動き始めようとした矢先今度は座布団につまづいて転び、変な角度で手をついたのが運の尽き、大切な右手を骨折してしまった。普段から「転んでも骨が折れたことがない」と変な自慢をしていた私「お年だから気をつけな」と等と親切そうに言われると、恥ずかしいやら情けないやら、利き腕が使えない悔しさも倍増して落ち込んでしまった。

人の痛みを感じるのには難しい、自分が体験して初めて人の気持ちに沿うことが出来ると身をもって知ったのがこの奇禍の唯一の収穫かもしれない。毎日通う羽目になってしまった接骨院にも様々な人生模様が見え隠れしていて、想像をめぐらす楽

しみを見付けてしまった私「転んでもただでは起きない婆」だね。

風邪に続いて骨折と、テレビ漬けの毎日になってしまったが、マスメディアを通じて人間の持つ素晴らしさと弱さをしっかりと見つけることが出来たのは不幸中の幸いだった。

ところで、単細胞の私にはマスコミを信じ易い欠点がある。昔大本営発表の戦果を信じ、「世界の為に行っている聖戦なのだから負ける筈は無い」と固く信じて疑わなかった小学校六年生のまま進歩しないで老いてしまった私。

だが活字や映像の持つ魔力は時には人をまやかすし、意のままに誘導する力が有るから怖い。人を信じることは難しい。それが国対国の政治的駆け引きとなれば尚更だ。価値観の違うそれぞれの物差しで測れば十人十色の見方が生れる。妥協できる限りは相手の意見にも耳を貸し、近隣国との話し合いに接点を見つけて欲しい。世界平和への道は遠くても、必ず道が開けると信じたい。

エルニーニョ現象とやらで、まだ夏の初めなのに真夏日を記録、変動の激しい気温に体がついていけない。まして利き腕を固定されたままの毎日辛い。左手の役立たずを呪い、痛む右手でただどしく包丁や鋏を握っては、接骨院の先生に叱られ、「二週間は治りが遅れた」と脅され、それはそれで初体験を面白がっている婆の日々は充実しているのかも知れない。

今度のことで、一人で生きているのではない我が身を再発見、人の情けも身に染みてこれからの余生を出来るだけ人に迷惑をかけないように生きてゆく準備をしなければと、しみじみ思い始めている八十路の曲がり角の私だった。

田島様、骨折とは知りませんが、原稿の催促などしてしまいました。

この編集子、打田兄と田島姉には聖、聖女を冠してお呼びいたしておりますが、原稿の催促など口ほどにもない尊敬の有様。

自分に催促を向ける編集子には、馬鹿野郎、俺が締め切りを破ったことはないだろう、と声を荒げろくせに。

パソコソを入れ替えられたそうですので、腕のリハビリを兼ねまして作文の宜しくお願い申し上げます。

《こぼ座だより》

「かがり舟」友情出演を終えて

白井啓治

五月十八日、札幌で行われた「北の未来をつむぐ」のイベントの中で演じられた、「音楽と語り・つむぎびと」の音楽朗読劇「かがり舟」に、小林の手話舞にお呼びがかかったのは昨年暮れのことであった。

表現集団「つむぎびと」で朗読を担当する熊谷敬子さんとは、こぼ座の東京公演での衣装担当として知りあった方である。

公演の最終日に熊谷さんから、かがり舟の台本を渡され、「東日本大震災を忘れない音楽と語りのつむぎらいぶ」を北海道の音楽仲間と開いているのですが、その台本を見てご意見を頂けますか、と言われたのであった。

こぼ座の東京公演では、熊谷さんには全員のボランティアで参加して頂いた事もあり、かがり舟の台本をあずかったのであった。

物語は、東日本大震災の大津波の被害にあわれた気仙沼のある方の実体験を基にして書かれたものであった。朗読台本としての完成度よりも、熊谷さんの確りとした問題意識をもとにして書かれてあったので、小生もその問題意識に応える形で二、三の指摘を書いて送ったのであった。

そのすぐ後に、弟子のしおみえりこ女史から、実は来年五月に札幌で、小林の手話舞を取り入れてかがり舟を演じたいのだけれど、という連絡を貰ったのであった。つむぎびとを結成している人達の事は聴いていましたので、小林にとっては願ってもない事なので快諾し、共演が実現する事となったのであった。

舞台表現というのは、そこに携わる人たち全員に確りとしたテーマ、問題意識をもってあたることが大切で、その意味では表現集団「つむぎびと」の人達は、プロ、アマ混成の技量もまちまちではあったが、物づくりの意識は皆さん確りとしていて、傍で見ている気持ちの良いものであった。小林にとっては大変貴重な時を与えられたといえるだろう。

札幌公演での「かがり舟」は、ことば座の朗読手話舞にたいしてオペラ&バレエ風音楽朗読ともいえるスタイルの舞台であった。

これはオペラ「竹取物語」他の作曲をされた木村雅信先生のお力であろうと思う。(舞台では木村先生はピアノを演奏)意識の高い表現舞台に久しぶりに接し、愉快的気分にして貰った札幌公演であった。

ことば座の6月定期公演では、札幌から熊谷さんとギターの亀岡三典君が来て、それに茨城出身のフルーティスト池田さく子さんが加わり、小林の手話舞を入れた「かがり舟」をお届けすること

なっています。

どうぞ、ご期待ください。

《読者投稿》

養生日記「許す勇氣、生きる力」 堀江実穂

つい最近まで私は、自分は世の中で一番不幸な女だ、と思い込み一人悩んでいた。

離婚して三人の子供達と会えなくなってしまった事、突発性難聴で右耳が全く聞こえなくなってしまった事、統合失調症で仕事も出来なければ車の運転も出来なくなってしまった事。まだある。

歯肉に黴菌が入り歯医者でもらった抗生物質が精神科で処方してもらっている薬と影響し合ったのか吐き気と下痢に悩まされ、食事も確り摂れない。

何で自分だけがこんなにとマイナス思考になると、それに付け込んでかギリギリ・バリバリ・ピーピーと激しい耳鳴りがし始め、「死ね！ぶっ殺すぞ！」といった幻聴が重なってくる。

幻聴だと分かっているけど、幻聴は幻聴でなく現実のこのように思えて来てしまう。他人にはおおよそ理解してもらえないこんな苦しみ。誰にも空想の世界はあるのだけれど、空想と現実との区別がつかなくなる苦しみを知る人は少ない。

友人に相談しても話は聞いてくれるが、幻聴の現実を理解することは出来ない。そして、自分が世界で一番不幸な人間だと思ってしまう。まさに負のスパイラルは果てしなく続く。

現在、平日は一人暮らしなので、一人で考える時間がありすぎる程あって、考えは何時もマイナ

ス方向に発展を広げ、プラスが現われるとこれは妄想だと直ぐにプラスを否定してしまう。

しかし、マイナス思考が充満してきても、今は少しづつそれが思考の中のことと捉えられるようになってきた。こんな最悪な現実だけど、結婚していた時と比べれば、今の方が遥かに幸せだと。

人格を与えられない嫁という立場を強要されて、風呂が一番最後に入れと言われ、そうしてきたが、ある時夜中の十二時過ぎに皆が入り終わったと思いい風呂に行く時風呂の栓が抜かれており、洗い桶には抜け毛の汚れ物などが入っていたりした。以来、私は別棟の二階の台所でお湯を沸かし、衣装ケースを使って体を洗ったりしていた。

洗濯物も同じ洗濯機を使わせてもらえず、バケツに水を汲み選択していた。夫であった人は仕事をせず、保育士として働いて貯めていた貯金も使われてしまい、統合失調症となって貰うようになった障害者年金もすべて夫に取り上げられてしまっていた。おまけに夫からは「バカ、クズ、粗大ごみ、死んじまえ」と罵られたりしていた。

その時の事を思い返すと、まだまだ幻聴などが収まらないけれど、自分を取り返してきた生活が送れるようになってきた。笑われるかもしれないけれど、洗濯機で洗った物を、毎日暖かい風呂に入り体を洗うことが出来る。そんな時、幸せと思えるようになってきた。少しだけではあるけれど、過去を許す勇氣をもち、それを今を生きる力に変えつつあると思っている。

堀江さんの病の養生記の中には、我々の日常に、忘れて放置してあるものの気付かせてくれる強さを感じます。

堀江さんには、「この養生日記、ぜひ続けて」投稿
いただけると、お願ひ申し上げます。

《一寸一言・もう一言》

||一寸一言||

業平橋（なりひらばし）

打田昇三

古今集で知られた「六歌仙」の一人である在原業平の「名にしおはばいざ言問はむ都鳥我思ふ人は有や無しやと」に由来した駅名である業平橋もクリスマスの宣伝のような「東京スカイツリー」という安っぽい名前に変えられてしまった。塔は誰が見ても一目で分るのであるから昔のままの名前で良いとは誰も思わなかったであろうか。

平城天皇の子・阿保親王と桓武天皇の娘・伊都内親王を父母に生まれた在原業平は、父親が「藤原薬子（ふじわらのくすこ）の変」に関わったこともあり官位は左近衛権中将従四位上までしか昇らなかったけれども歌人として脚光を浴びた。

「ちはやぶる神代も聞かず龍田川からくれないに水くくるとは」は百人一首で良く知られている。

清和天皇時代の貞観三年（八六二）三十六歳の時に母親の喪に服して一年間公務を休職し東国を回った。隅田川の畔で、背が黒く腹が白い、人間とは逆な渡り鳥を見て正直に「いざ言問わむ」と質問したのであろう。其の俚に解釈すれば人を恋うる歌のようだが、凡そ千百数十年後に自分に困んだ名称が消えることを予想して、本当は「我思う駅は有や無しやと」と言いたかったのではなかろうか？と、つまらない想像を試してみた。

援助すれば憎まれる

菅原茂美

そんな話があるものか？…と言われるかもしれないが、事実のようだ。例えば親戚同士で、誰かが困窮を極め、見るに見かね裕福な誰かが、応急の援助をする。受けた方はありがたく頭を下げるが、ある期間を経ると、『あいつ、金持ちのくせにたったこれだけしか助けてくれない。けちッ！』と罵る。恩を仇で返す口ぶり。

これと同じ様な事が国家間でも見られる。かつて日本は、現韓国を侵略した戦争賠償として、戦後多額の経済援助をし、道路や港湾などインフラ整備を行った。最終的にはそれをもって戦争賠償は完結し、今後一切、賠償請求はしないとして条約を締結した。しばらくしたら日本の繁栄が気に障る。何かをもっと請求しなければ腹の虫がおさまらない。そこで出てきたのが、従軍慰安婦に対する賠償である。日本はすでに解決済みとすると、米国で従軍慰安婦の銅像を建立、米世論に訴え、ヨーロッパでも同様行為を繰り返す。かつて日本は政府からではなく、民間資金で慰安婦に支払おうとしたら、一部は受け取ったが一部は受け取り拒否。明確に政府が謝罪し、誠意を持って償えばよかつたのに。

特許権侵害や、竹島占拠など、目に余る。

中国も同じ事。日本はいかほどODAなどで援助したかわからない。しかし、やはり腹の虫がおさまらないのか、世界中を駆け巡り、日本の悪口を言いふらして、さらに尖閣諸島を日本が盗んだと決めつける。防空識別圏設定やら、領海侵犯やら、軍事力で威圧してくる。孔・孟の仁義礼智の徳は、どこへ行った？

||もう一言||

短い名文

打田昇三

「平家物語」に挑戦して長い文章を書いているので少し言い難いのだが、読む立場からすれば文章は明快簡潔で短い方が良い。しかし文章を書くうとする者は「読まれることを考えて格好をつける」から、どうしても普段は使わないような言葉を拾ったり難しい言葉に変えたりしたがる。

読み手が直ぐに理解できる文章こそ理想的ではあるが現実には中々難しい。清少納言だか和泉式部だか紫式部だか忘れたけれども「あらず」の三文字で済ませた返書は、短くても当事者以外に通じないから問題外である。簡潔で意味が分かる文章は戦国時代の三河武士・本多某が陣中から妻に宛てた手紙「一筆啓上、火の用心、おせん（娘・幼鬼）泣かすな、馬肥やせ」が知られている。

さらに短い文はローマの英雄シーザーが遠征先から愛人クレオパトラに「来た、見た、勝った」と書いて無事と戦勝を知らせた手紙とされる。

日本でも状況は逆ながら似たような簡潔な文として知られるのが、明治九年に熊本で起きた「神風連の乱（不平士族の反乱）」に際して、暴徒に官舎を襲われ殺害された鎮台司令官・種田政明少将の愛人が東京の実家に打った「ダンナハイケナイ、ワタシハテキズ||旦那はいけない（死亡、私は手傷軽傷）」という電文である。

発信者は粹筋から身受けされて任地に同行していた「小萬」という女性らしいが、さすがに明治の陸軍少将が見込んだ女性らしい名文だと思ふ。

此の電文は俗謡などに歌われて知られたらしい。

【特別企画】

打田昇三の『私本・平家物語』

巻第一 (3-2)

・殿下の乗合(てんがののりあい)のこと

皇族の敬称である「殿下(でんか)」という言葉は戦時中に飽きるほど聞かされていたが、これを「てんが」と読むことは知らなかった。平家物語の時代には「てんが」と呼んだらしい。昔も今も高位高官は天下が自分のものだど錯覚するから「でんか」よりも「てんが」のほうが適切な表現なのかも知れない。昔の人は表現が上手だった？そして「乗合」はバスのことではなく、双方の乗合わせ乗り物の俣で遭遇することらしい。つまり殿下が乗った高級車(平車)だからスピードは出ないが絡む交通トラブルの話である。事故にはならなかったのだが、双方の思い上がりから予想もしない大事件に発展してしまった。

現代だと内閣総理大臣が衆・参両院の議長か最高裁の長官か、臣下で最高位にある人物が乗った高級車と、政界を牛耳る平家のお坊ちゃんが操縦するスポーツカーとが信号の無い交差点で交通事故を起こしそうになった。時刻が夕暮れ時で双方ともに相手と良好認識できない。高級車のほうは運転手も「俺は偉い」と錯覚しているから避けようとしなない。スポーツカーも格好良く飛ばしてきたのに道端に避けたりしたら面子が潰れる。強引に走り抜けようとして阻まれ無礼者として辱めを受けた。お坊ちゃんは泣く泣く家に帰ってお爺ちゃんに訴えたから、孫可愛さで怒りまくった爺ちゃんが三百人の家来を使い相手に報復する…という壮大でロマン(老慢)に満ち

た物語？である。

此の事件が切っ掛けとなって、後白河法皇を始めとする朝廷内部に「平家憎し」の感情が起ころる訳であるが、平家が憎まれ始めたのは事実として実際にはこの章段に書かれた内容のような出来事は無かつたらしい―強いて言えば、是から始まる平家没落の物語に大義名分を与える為の序章？として印象づけに書かれたのかも知れない。多少、大袈裟な内容ではあるが、日本中を支配した平家が徐々に没落していく物語が始まる訳であるから此の程度のフィクションを必要とした。この出来事は尊皇攘夷思想に影響を与えたとされる頼山陽の「日本外史」にも記録されているから「朝廷を軽視した平家が滅びるのは因果応報！」と思いつむには必要な話であり、逆に平家の後裔である方、或いは源氏よりも平家が好き、という方は読まずに飛ばして頂いたほうが良いかもしれない。

本題に入らせて頂くと、平清盛が武門出身の人物として初めて太政大臣になったのは仁安二年(一一六七)であるが、その二年後の嘉應元年七月十六日には後白河上皇が出家して後白河法皇となった。通常は仏門に帰依して髪の毛を剃り落とし法名を名乗る場合には、世俗を絶ち、念仏三昧(ねんぶつざんまい)の暮らしを送るのだが、此の人にそう言う注文をしても無理であり、出家してからも全ての政治に介入した。尤も当代の高倉天皇は既に述べたように小学生であるから、ホウオウでもキリンでも政治を見なければならぬ事情は分かるが、それならば軽々しく坊主頭になることはなかった。何よりも高倉天皇には平清盛が後見人のような形で陰に付いている。

当然の結果として法皇の御所と天皇の御所とで日本国の運営がなされる訳であり、自動車で言えばハ

ンドル、アクセル、ブレーキが各二つ付いた高性能？車が、後白河法皇と平清盛に操られて走るようなものである。原本には「院(法皇方)・内(天皇方)わく方なし」區別がつかない」と書いてある。そして権力としては法皇方が強いから、同じように仕える公卿(上級官僚、殿上人(中級官僚)から北面(ほくめん)法皇の御所を警護する武士団)までが官位、俸給、出世などの面で天皇方よりも優遇されていた。そうで有りながら人間の慾心はキリが無いもので「願望として誰かが失脚すれば、そのポストが貰えるであろう…」とか「誰かが死ねば、その領地が空くであろう…」とか、親しい者同士で噂を合っていた。その根底には、平家一門が押さえている主要なポストへの妬み(ねたみ)やら恨みがあったので「誰かが…」と言うのは「平家一門が…」であろう。

後白河法皇さえも、ごく内々に仰せられて「昔から代々に亘って朝敵を征伐した者は多かつたけれども、現代のようなこと(平家が、その功を誇って独裁を行うようなこと)は無かつた。かつて平貞盛と藤原秀郷が平将門を討伐し、源頼義が安倍貞任・宗任(さだとう・むねとう)を滅ぼし、源義家が清原武衡・家衡(たけひら・いえひら)を攻めたけれども、その褒美として与えられたのは諸国の受領(ずりょう)国主)に任官される程度のことであつた。それなのに平清盛が、その功績を誇り、破格の出世を遂げ、この様に思いのままに振舞うことは間違っている。是は世の中が末世になって、仏教で言う国王の政治が衰えた証拠(まほうしん)から)である…」と嘆いておられた。当時の思想として国王の政治も仏教と一体の立場から見られていたのである。

然しながら、後白河法皇がこれらのことを面と向かつて清盛に言うことも出来ないし、清盛を諫める

ことなど、さらに出来なかつた。平家の方でも後白河法皇の存在は煙たくても、皇室に寄生するような立場では是を恨みに思うようなことも無かつたから、双方の腹の内はどうでも、表面上は穏やかに過ぎていったのであるが、此処に思いも掛けずに或る事件が起き、両者の関係が悪化すると共に其れが原因で世の中が乱れることになる。

その事件は嘉應二年十月十六日に起こつたとされるが、七月三日説もある。最初に述べたように架空の出来事ならば日付はどうでも良いのだが、話の展開としては冬場のほうが良い。この年は比叡山の僧兵があれこれと訴えを起こし、それに依り政府高官が罷免されるようなことも起きていて全体としては後白河法皇やら、神仏の威光を笠にした僧兵の活動など、平家に対抗する勢力も少しづつ出現して来るのである。「殿下乗合」は、その象徴として書かれた寓話なのである。

平家一門で「小松殿」と呼ばれ、統領の清盛に次ぐ人物と言えは嫡男・重盛である。多くの歴史書は此の人を君子化していて、父親・清盛の暴走を諫めたように言われるが、それを否定する説もある。人間であるから完璧で無いほうが信用はできる。その小松殿(平重盛)の次男は資盛(すけもり又はとももり)と言ひ、僅か十三歳で越前守(福井県知事)の官職を与えられていた。勿論、名目だけであり越前国に行ったことも無い。

この兄ちゃん、雲(みぞれ)混じりの日に退屈しのぎで三十人ほどの家臣と騎馬を揃えて鷹狩りに出かけた。これは二月説の場合で、七月だと焼け付くような陽照りになるから避暑に行ったことになる。行き先は洛北、現在だと上賀茂神社の手前付近になるのであろうか、其の辺りに馬場が在つたらしい。

鷹狩りをしながら馬術の訓練も出来る。都合の良い話ではあるが、小鳥たちには迷惑この上ない。一日中、駆け回つて日暮れに六波羅館へ帰つて来たのであるが、その途中で事件が起こつた。場所は京都市左京区の中心部である。

当時の摂政(公式の天皇補佐役)は松殿と呼ばれた藤原基房(藤原道長の子孫・近衛家の祖である基実の弟)であつたが、屋敷が中御門東洞院(なみかどびがしのとういん)と言ふ場所に置かれていたので、京都御所の南東部にある郁芳(ゆうほう)門から参内しようとして牛車に乗り行列を従えて大炊御門大路(おおいごもんおおじ)に差しかかつた。時刻は冬の夕暮れ時である。現代の常識から考えると盗賊でも無いのに暗闇の中を、然も天皇に拝謁するために出勤するのは不自然であるが平家物語にはその様に書いてある。此の話が事実では無いと言われるのも当然と思われるけれども平安時代の公務員は、現在のように朝に出勤して夕べに帰つてくるような勤務形態では無かつたらしいから、一応は原文に従つておく。

一方、平資盛らの騎馬軍団も六波羅にある平家館を目指して家路を急ぎ、東洞院大路か烏丸大路かを疾走してきた。馬には速度制限の適用は無かつたしライトも着いておらず、馬の目だけが頼りで夕闇の道を抜けて来た。京都市内の大通りではあるが道幅は現代ほど広くは無かつたであろう。そこで交差点を曲がつて来た摂政・藤原基房殿が乗る牛車と遭遇したのである。薄闇の中で天侯が悪いから両方共に相手が良く見え無い。牛車に従う連中は当然のように相手を避けさせようと「何者であるか!御出(ぎょしゅつ)なるに無礼であるぞ。早く馬を下りて控えよ!」と怒鳴つた。摂政の家臣で自分の主人より高官が居ないと思つているから主人の名を言わない。

然も大勢の家来が付いているので飽く迄も威圧的である。

当時の社会通念からすると官位の低い者が道を避けて相手を通過させることになるのだが、今を時めく平家の御曹司と同年代の家臣たちであるから面倒な社会序列に拘らない。更に相手が誰であるか明らかにしていかないで礼儀を無視する訳では無いが馬から降りて道端に控えるなどということは考えない。そのまま行列を無視して駆け抜けようとした。是に對して摂政の従者たちは、何処の若者かは知らないが(或いは薄々、察してはいたが無視して)騎馬の若者たちに襲い掛かり馬から引き摺り降ろした。暗闇に紛れて暴力を加えた者も居たらしい。相手が公卿の家臣と言つても武士であり、人数も圧倒的に多いから三十騎の平家軍団でも簡単に叩きのめされたのである。怪我は兎も角、武士としては最大の恥辱を受けたことになる。現代用語?で言えばコテンパンに叩きのめされた平資盛は、やつとのことで六波羅の平家館に辿り着き、清盛爺ちゃんに涙ながらに自分の正当性を訴えた。源平盛衰記では、平資盛が笛の稽古に行つた帰りに事故?に遭ひ、それを父親の重盛に告げたところ逆に下馬しなかつた非礼を論されたことになつているが、それでは面白くない。

平家物語に忠実に書くと、話を聞いた相国禪門(しようくぜんもん)相国は太政大臣、平清盛は形だけでも出家したから禪門と敬称された。は、「た」とい相手が摂政殿下であつても、淨海(出家した平清盛の法名)の近親者には、それ相応の対応があつて然るべきなのに、何の配慮も無く孫の資盛に暴行を許し恥辱を与えた。これは深い恨みである。この様な事を仕出かされては平家が世間に見くびられる。この事は必ず相手に思い知らさずには置けない!」と元氣の良いことを言つた。

これに対して重盛は穏やかに清盛を宥(なだ)めて「是は父上がお怒りになる程の出来事ではありませんが。もし相手が、平家に依って引き立てられている撰津源氏(せつげんじ)源氏の本流だが当時は平氏に從属していたの頼政や光基などに侮辱されたのであれば平家一門の恥辱と言えるでしょうが、相手が撰政殿です。是は平氏の一族として礼を失した我が子の失態ですから無礼の程をお詫びしなければなりません」と言い、資盛に從つて居た三十人の若武者を呼び集めた。恐る恐るやつて来た一同に重盛は資盛の非を伝え「今度のことで私は撰政殿下(相手方)にお詫びをしたいと思つている。お前たちも気を付けるように！」と嚴重に注意をして、自分の屋敷へ引き揚げた。

ところが、清盛のほうは自分が袋叩きに遭つたように悔しがつており、重盛に言われたことなど意中に無く、平家の配下にいる田舎武士で粗野な人物ばかりを呼び集めさせた。その中には清盛の腹心で清盛以外には例え天皇の命令でも聞かない田舎の偏屈武士である瀬尾兼康や難波経遠などが居て集まつた人員は六十余人になった。その連中に対して清盛は恐ろしい命令を下したのである。

「来る二十一日には、高倉天皇の元服の儀式についての打ち合わせが宮中で行われる。これには撰政殿下が必ず出席される。其の方たちは何処か良い場所待ち受け、先導役、護衛などの者どもを捉え“たぶさ”を切つてしまえ！これで資盛が受けた恥辱を晴らすことが出来る…」と。

「たぶさ」とは髪の毛を頭上に束ねた状態を言うらしいが、それを切られるとザンバラ髪になるから行列の供が出来なくなる。其の様なテロ行為が待ち受けているなどは夢にも思わない撰政殿下・藤原

基房は、高倉天皇が明年には元服をされるので、その儀式の詳細を決めるために、暫くは宮中に泊まり込む心算で身仕度を整え、屋敷を出立した。この辺にも話の信憑性が疑われる要素があるので、高倉天皇は平清盛の権力保持に必要な存在である。その天皇の元服儀式を準備する人物を襲撃することは清盛が自分の首を絞めるようなものである。この事件は無かつたことが明白であるけれども平家物語の作者が苦勞して創作した話であるから最後まで我慢して聞いて頂きたい。

平清盛が予測したように其の日、藤原基房の行列は宮殿へ向かつた。一週間前の夕暮れに平資盛らの騎馬と遭遇したときの経路ではなく、行列は一所所北の待賢門から入門するように中御門大路を西に向かつて来た。猪熊小路と堀川小路とが交差する地点に差しかかり、待賢門が見えて来た頃に異様な集団が待ち受けているのが目に入った。

戰場へ行くように完全武装をした六波羅(平家)の軍勢である。その数、三百騎余り、何事かと驚く間もなく撰政関白・藤原基房の乗り物は、関(とき)の声を挙げながら攻め寄せた軍勢に包囲されてしまった。役目から当然ではあるが警護の武士団は防戦態勢をとつた。しかし行列の際の警護人数が規則で定められて居て此の場合は近衛府の武官が十人しか居ない。従う人数は多くても役に立たない連中はかりで、とても三百には及ばないから一人、二人と追いつめられた。

当日は主の関白殿下が立派な衣装を身に付けているので、行列に従う「隨身」と呼ばれる武士たちも其れ相応に晴れ着を着ていたのだが、暴徒たちは一向にお構いなく彼らを馬から引き摺り降ろし打ちめし乱暴をした後に「たぶさ」を切つてしまった。

出演直前に鬘(かつら)を盗まれた時代劇役者のようなものである。彼らが晴れの行列に加えられることは名誉であり近衛府の武官として相應の地位にある役人なのだが、例えば下級公務員ながら選抜された府生(ふしょう)の武基とか、地方国司並みの官位を持つ蔵人大夫(くらんどのたゆう)隆教とかも、遠慮なく被害にあつた。その際に暴徒たちは「是は汝の髪(たぶさ)が切られたものと思え」と親切に教えてくれた。

その上に、暴徒たちは関白殿下の乗っている牛車の窓を弓の端でこじ開けて脅かし、窓の簾(すだれ)を筆(むしり)取り、何の罪も無い牛に近寄つて牛車を曳くために付けていた鞍(くら)や紐などを斬り放つた。尤も牛にしてみれば窮屈なものを取り払つて貰つて嬉しかつたかもしれないが…このようにして散々に乱暴を働き、引き散らかした挙句に勝利の関(とき)の声を挙げて六波羅の館に凱旋した。(この様な場合に凱旋といふかどうかは疑問があるが報告を聞いた清盛入道は「命令どおり良くやつた…」と満足であつた。

しかし、既に述べたように此の話には小学生でも分かるような矛盾がある。関白の周りには飾り程度のガードマンしか居ないので、それを三百騎の平家軍が狭い道路でどうやって攻めるのか？

順序良く攻撃しなければ同志討ちになる。最初に攻撃した何十騎かが、警護の武士の頭髪を乱している間に残り二百何十の平家軍は何をしていたのであるか?…余計な心配はさて置き、被害者となる関白殿下・藤原基房公のほうは突然の竜巻に襲われたように呆然としているばかりであつたが牛車の左右に従う者で身分は高くないけれども確りとした者が居り、解放感に浸っている牛を捕らえて牛車に繫(つ

なぎ、涙ながらに中御門にある屋敷に主を引き揚げさせている。この者は、かつて因幡国の先使(さいし)と言って国司不在の国に使者に立つ役目をしたことのある鳥羽の国久丸と言う人物である。他の者たちは、恰好だけは立派で威張っていても役に立たず、河童のようにされた頭を抱えて嘆いているだけである。関白殿下は束帯(そくたい)儀式衣装)の袖で涙を押さえながら、屋敷に戻ってはみたが大切な宮中の出仕は出来ず、何をどうして良いか分らず、今日の不可解な出来事を、どの様に捉えて良いかも分らず晴れの衣装を只々涙に濡らしていたのである。

平家物語原文は尤もらしく続く―考えて見れば藤原氏の祖である大織冠・淡海公(たにしよくかん・たんかい)―藤原鎌足と藤原不比等)のことは言うまでも無く、忠仁公(清和天皇時代の摂政である藤原良房、昭宣公(良房の跡を継いだ藤原基経)から此の方、摂政関白が此の様な酷い目に遭うことは前代未聞であり、これこそが「平家による悪行」の始めである。なお、大織冠と言うのは皇極天皇時代の西暦六四二年に作られた冠位制の最高位であり藤原鎌足だけが受けた。

結局、馬鹿みたいな合戦に勝利した平家軍であったが、この事件を知った平重盛は余りにことに驚き狼狽して三百騎の者どもを残らず勘当した。此の場合には時代劇に出てくる「勘当」とは違って実力行使に関わった罪の程度に応じて処罰が行われたことらしい。重盛は「たとい清盛入道が理不尽な命令を下したとしても、どうして此の重盛に知らせなかったか!それにしても、本来、一番に悪いのは最初に事件を起こした資盛である。諺にも『梅檀(せんだん)は双葉より香ばし』』と言うのではないか。既に十二、三歳になる者が摂政関白への礼義を知らずに居てどうするか。この様な見苦しい事件を起こし、平家頭

領たる清盛入道の悪名を立たせるのは不孝の極みである」として資盛を暫くの間、伊勢国に追放した。

この処置を聞いた天皇も朝廷の重臣たちも、さすがは重盛である!と感心したと伝えられる。「殿下の乗合」は此処で終るのだが、既に述べたように此の章段に書かれた内容(金清盛の具体的な横暴)がフィクションであるとすると、意外や意外、摂政関白に乱暴を働いた人物が清盛では無くて実は良い子の重盛であった、とする説もある。

昔のことであるから確かめようは無いが、昭和前期の歴史学の先生方が論議されていて、その根拠とするところは、事件が起きた時期には平清盛は福原(神戸)に行っていて都には居なかった…:というのである。現場に居なければアリバイは証明される訳であるが、京都と神戸では、それ程の遠方でも無いし、近頃のドラマでは、どの犯人も最初は立派なアリバイを準備している。清盛か重盛かを詮索するにしても時期が遅い。現代は「殿下の乗合」自体が、平家の横望を強調するための創作劇とする評価が定着しているようなので此処は清盛公に悪者になって頂いて決着したい。

次(四)は「鹿谷(ししのたに)」に入る。鹿が「しし」と呼ばれるのは食獣として「猪(しし)」と一緒にされるかららしいが、猪の居る谷と鹿の居る谷では危険度が違う。それはともかく、平家に対する具体的な反抗が表面化することになり、その主役となる人物が平重盛に最も近い公家の藤原成親である。成親が後白河法皇の近臣というのは微妙であるけれども反平家運動は一旦、挫折し「額打論」から目立ち始めた僧兵が朝廷を相手に無理難題を吹きかけるようになる。その僧兵に対抗するのは、やはり平家しかないのである。(続く)

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel 0299-55-4411

今月号から当会報も9年目に入りました。今期は「九重の祝いの年」。当会報も9月で、通巻100号となります。9月21日〜23日には、100号を記念してみんなの広場にて風の会展とイベントを企画しております。詳しくは、来月号にてご紹介いたします。風の会では、皆様の「投稿をお待ちいたしております」です。内容は自由。400字詰め原稿用紙5枚以内。毎月25日が締め切りです。投稿いただいた原稿は必ず掲載させていただきます。よろしく願い申し上げます。

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2
TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

【こむぎびと】・特別友情公演】

かがり舟 Ⅱ だれかあの火を見たかⅡ

脚本・熊谷敬子 挿入手話舞歌・白井啓治
作曲・木村雅信 ギター・亀岡三典

フルート・池田さく子

※東日本大震災で実際にあった「気仙沼」のある女性の物語。後世に伝えたい、忘れてはならない出来事がある。伝承すべき物語を木村雅信の音楽にのって朗読と手話舞が心の姿を創ります。

(挿入手話舞歌)

①『言葉は心の容』

心を容にする。それが言葉です。

だから

言葉には容があり

そして姿があるのです。

言葉の姿は舞。

舞は人の語る言葉の姿なのです。

だから

舞は自由で自在でなければならぬのです。

詩は心の譜面です。

だから

詩を詠う時は自然に舞い

肉体は踊りはじめなのです。

詩は心の中に潜んでいる自分の真実を

流れにする譜面です。

だから

詩は言葉に書くのではなく

声に詠うことで紡がれていくのです。

言葉はそのまま声にならなければならない。

声はそのまま姿にならなければならない。

言葉は物語という叫びなのです。

叫びとは人の祈りなのです。

②『かがり火の舞』

人の精神世界は

一本のかがり火の光によって開かれます。

そして

かがり火の光は

人の心の

望みを照らしてくれます。

人は凍りついた暗闇に怯えていた時

一本の燃える木の枝を手にした事で

生きるという希望の物語を紡ぐことを知りました。

炎をあげて燃える一本のかがり火は

闇を照らし

凍えた心を温めてくれる。

だから

人は絶望を感じた時には

あたたかい炎をあげる松明を

心にかかげるのです。

高く燃えあがるかがり火の明かりに

希望の物語の紡ぎ。

③『幸せの言葉』

風は幸せ言葉

風は温もりの揺りかご

風は光の景をつくる

さあ

風に包まれて蝶になろう

そして

風に包まれて揺れる波に踊ろう

風は幸せの言葉

風は温もりの揺りかご

風は光の景をつくる

さあ

春には波間にたくさんの命が生まれ

そして

たくさん色が染められます

大地に生きる者達よ

大地はお前たちのものではなく

お前たちが大地のもの

さあ

立ち上がって

微笑む水面に反射した光の輪の中で

自由に

そして

自在に

私のそしてあなたの幸せを踊ろう

「こむぎびと」は、「3. 11を忘れない音楽と語
りのこむぎびと」というステージを通して、

3. 11の意味を問い、答えを探り続けるために

2012年3月に結成された札幌の表現集団です。

ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ことば座第27回定期公演

2014年6月14日、15日（14時30分開場、15時開演）

入場料2000円（小中学生1000円）

第一部 常世の国の恋物語第34話

「風に舞う古歌は恋詩」(万葉集・古今集)

朗読: 白井啓治 手話舞: 小林幸枝

第二部 つむぎびと(札幌の表現集団)特別友情公演

朗読劇「かがい舟」＝だれかあの火をみたか＝

朗読: 熊谷敬子 手話舞: 小林幸枝 ギター: 亀岡三典

(15日茨城出身のフルート奏者 池田さく子さん、友情出演予定)

ことば座 茨城県石岡市府中5-1-35 ☎0299-24-2063 Fax0299-23-0150

ふるさと「風の会」8周年歩み展

&

風のことば絵教室展

2014年6月14日・15日：10時～14時30分（入場無料）

ふるさとルネサンス講座の受講生4人と講師が中心となって、会報を発行し始めて8周年となります。兄妹であることば座の定期公演前に、8周年の歩み展を開催いたします。会員の書きためた小文を集めた文庫をはじめ、風の会の分科会として兼平智恵子の開いている「風のことば絵」教室の作品を展示いたします。

(ふるさと風の会展のお問い合わせは、打田昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-46-2457 まで)